

文藝春秋

新天皇皇后「知られざる履歴書」
村上春樹特別寄稿/「働き方改革」徹底批判 六月特別号

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可
令和元年六月一日発行 毎月一回一日発行
第九十七巻第六号(五月十日発売)

文藝春秋

々

特別企画

「令和」の未来年表

6
2019

Entered as 2nd-Class Matter at the Post Office in San Francisco, Calif., U.S.A., 2nd-Class Postage paid at San Francisco, Calif. (USPS 079-500)
"THE BUNGEISHUNJU" June 2019 Vol.97 No.6 Published Monthly by BUNGEISHUNJU Ltd. Tokyo, JAPAN

昌版印刷株式会社
Printed in Japan

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可
令和元年六月一日発行 毎月一回一日発行
第九十七巻第六号(五月十日発売)

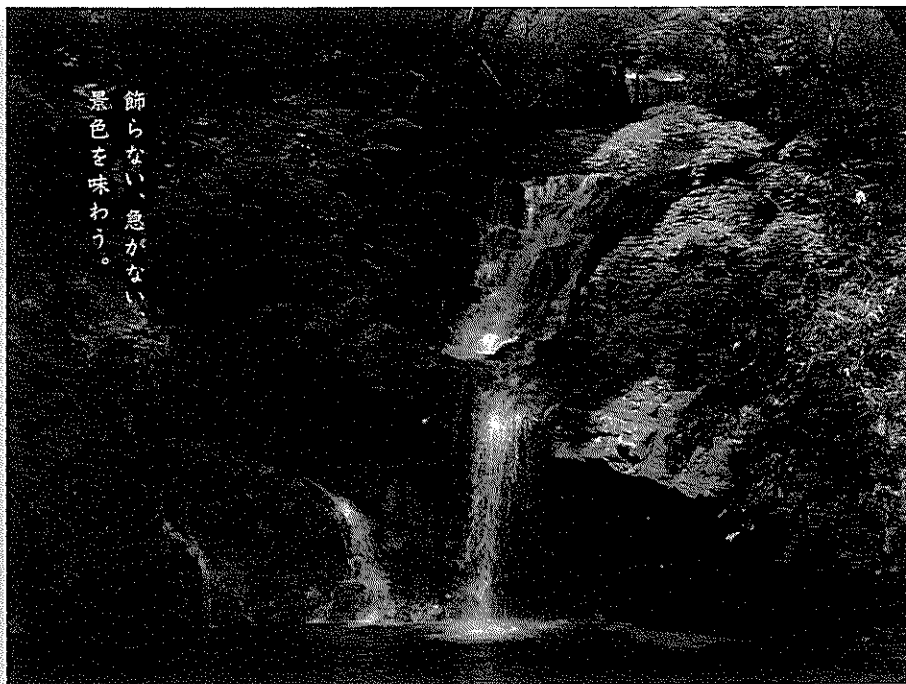
文藝春秋

(第九十七巻 第六号)

特別定価 一〇〇〇円

本体九二六円

雑誌07701-06



福島県二本松市/魚止滝

飾らない、逸がない
景色を味わう。

変わらない、ふるさとの笑顔。
変わらない、ふるさとの味わい。
みちのくのぬくもりを一緒に添えて：
お土産は、かんのや「家伝ゆべし」。



西尾抹茶あん

家伝
ゆべし



まごころに おいしさ咲かせて

本社/福島県郡山市西田町大田字宮木田3番地 TEL.0247-62-5676

家伝ゆべし(西尾抹茶あん)
のご注文はこちらまで

かんのや



全国発送承ります。

インターネットで
(24時間受付)

www.yubeshi.co.jp

お電話で
(受付時間9:00-17:00)

☎ 0120-040-141



4910077010696
00926

將軍の世紀

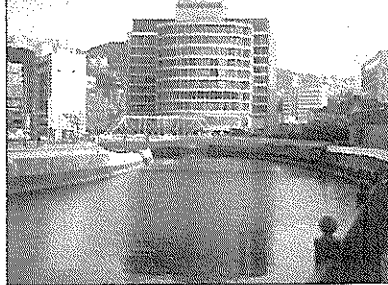
やまうちまさゆき
山内昌之
武威野大学特任教授・
東京大学名誉教授

「第十八回」鎖国と一國平和主義

通俗的に想像される「幕府の告知」はなかった——
徳川時代を象徴する外交政策「鎖国」の実態に迫る。



(上) 最高の閣老、酒井忠勝
(下) 現在の長崎・出島周辺



一、鎖国令と「歴代の御被官」オランダ

「建物は、非常に粗末で、一見山羊小屋みたいな外観であり、松の木の柱に粘土壁の二階建、階下は荷造場として使う物置小屋、階上が住居になっている。そこに住む人々が自費で壁紙を貼ったり、日本流に畳を敷き詰めたり、戸、障子を入れて住居を整えるのである」（エンゲルベルト・ケンペル著、今井正訳『日本誌』）。

これは、元禄年間に日本を訪れたドイツ人エンゲルベルト・ケンペルによる出島とオランダ商館の四千坪ほどの素描である。初期の長崎奉行・榊原飛騨守職直は、「宣教師と悪人共」の布教を止めないポルトガル人を抑えるために「牢獄の様な島を作った」と述べる（ニコラス・クレーケバッケルの日記「一六三六年七月二十五日条『平戸オランダ商館の日記』第三輯」。「牢獄」という表現は、平戸にあったオランダ商館の上級商務員フランソワ・カロンとも共通する。カロンは、島原の乱が終結して三年後、寛永十八年（一六四一）にオランダ商館の長崎出島への移転命令を聞いて驚いたはずだが、不満をおくびにも出さなかった。ケンペルは、オランダ人が「牢屋住まいにも等しい出島」に「恥辱的な制限」を受けな

がら、不自由に耐え忍んだ理由を「儲けたい一心と、山国日本の高価な市場に対する執着」に求めた。「おぞましき黄金哉。人間万事欲の世の中か」と。

フランスの啓蒙主義者ヴォルテールは、「ジャワでは王侯の如くに振舞っているオランダ人も日本では牢獄のような小島で奴隷のような境遇に甘んじている」と酷評した（加藤榮一「出島論」『岩波講座日本通史』近世2）。

オランダ人は機を見るに敏であり、島原の乱を、ポルトガルなどカトリック教団を排除し、イギリスやデンマークなどのプロテスタント競争者の日本市場参入を阻止する好機と考えた。幕府の老中たちは商館長クレーケケルの原城砲撃に何度も謝意を表した。上使の松平信綱は、一揆側で日に十五人、十人、五人が死ぬなど砲撃の成果が上がったことに触れ、「責下は大いに尽力し、皇帝に忠勤を励んだ。我々は毎日、責下が行ったこと、また大砲の事故で死んだオランダ人のことを、皇帝に書いてある」。將軍家光の上聞に達したことはオランダ外交の成果であった。大坂に行くと、町奉行の久貝因幡守正俊と曾我又左衛門古祐は、砲撃によってオランダがいつも將軍に「極力忠勤を励む用意があることを、よく示した」と褒めた。「オランダ人の心はポルトガル人よりよい」というのだ。江戸に着いたクレーケバッケルは、城中

でも破格の待遇を受ける。閣老の酒井忠勝と阿部忠秋が「献上品が置いてある部屋」でじかに応接してくれたからだ（クレーケバッケルの日記「一六三八年四月十三日、五月十八日各条『平戸オランダ商館の日記』第四輯」）。

その翌日、待ち望んだ吉報が留守居の牧野内匠頭信成から示唆された。牧野は家綱誕生後に御傳頭になっていく。家光の信頼が高かったのだろう。牧野は、酒井忠勝らしき「最高の閣老」が自分同様にポルトガル人の日本来航を阻げ、通商を完全に禁止しようとしているが、將軍は最終決定をまだ下していないと知らせた。ポルトガル人は、何度も注意したのに、「毎年日本に宣教師を連れて来て、キリスト教をひろめるのを止めない」。牧野は断交の原因として、「有馬、天草等の叛乱と、毎年数え切れぬ程多数の人が、宣教師のために死んでいる」事実をあげた。幕府の好意は、長崎の通詞にも寄せられた。普段なら「皇帝の倉庫」でじかに受け取る時服を城中で拝領したのだ。まもなく島原藩主になる高力撰津守忠房から多数列座の上で時服二十枚を受領した。通詞は十五年間も東インド会社に勤務しながら、これほど名誉ある暇乞いを賜ったことはないと驚く（クレーケバッケルの日記「一六三八年五月十九日、二十二日各条」）。

南蛮の「きりしたん国」が日本のキリシタンと結盟